



国交労組

国土交通行政の体制拡充をめざし すべてのなかまがとりくもろう

国土交通省の職員や、国土交通行政にかかわる独立行政法人の職員は、国民が安心してくらせるよう日夜奮闘しています。しかし、連年の定員削減により、現場での人員不足は限界を超え、安全・安心や生活に直接かかわる問題が発生しかねない状況となっており、体制拡充は喫緊の課題となっております。

国土交通労働組は、今年度も国民の生命や財産をまもるため、国土交通行政を担う組織・体制拡充の国会請願署名を提起し、とりくみます。署名を軸に多くの国民との対話を広げ、国土交通省の体制拡充を実現させましょう。

署名の最大集約を とりくもう

体制拡充署名は、国土交通労働組の「基幹の運動」として第11回定期大会で決定し、職場の内外でとりくみます。確実にとりくみをすすめることを意志統一しておいて誰もが一致できる増員要求の請願項目であり、わたしたちの要求に根ざしたものです。身近

なとりくみとして、まずは、組合員だけでなく管理職も含めた、同じ職場で働くすべての職員からの集約を確実にやり遂げましょう。

体制拡充署名は、職場の労働環境改善だけではなく、国民の安全・安心をまもるとりくみでもあり、全国的な運動となります。よって、職場内でのとりくみだけでなく、職場外の幅広いなかまと共闘し、とりくみます。職場内でのとりくみ

国会請願って何？ 採択されるとどうなるの？



昨年度、国会請願署名を紹介議員（共産党：高橋千鶴子）に提出

国会請願は、国民が国政などに対する要望を直接述べることです。憲法に保障された国民の権利であり、請願しようとするものは、国会議員の紹介によって、要望事項を記した請願書を各議院の議長あてに提出します。提出された請願は、所管の委員会等で審査のうえ、その内容が妥当と思われるものは、衆議院または参議院の本会議で採択され、内閣に送られます。請願を受けた内閣は、請願の処理経過を各議院に報告することが義務付けされています。つまり、体制拡充署名が請願採択された場合、内閣のなかで、国土交通省の体制拡充について議論されます。この議論をつうじて、総定員法や定員合理化計画の撤廃につながることを期待しています。

体制拡充署名のとりくみスケジュール

- 11月 職場や地協事務局への署名の発送
- 12月 中央段階で、関係労組・団体への署名の要請を実施
- 1～2月 地方段階で、関係労組・団体への署名の要請を実施
- 3月25日 職場内の集約終了【第1次集約】
- 3～4月 地元国会議員要請（各地域でのとりくみ）
- 4月22日 職場内・職場外の集約完了【最終集約】
- 4月下旬～5月 中央での紹介議員への要請
- 5月上旬～中旬 国会議員要請行動、署名提出

産別共闘の署名も とりくもう

体制拡充の国会請願署

国会議員に体制拡充署名の趣旨を説明し、紹介議員になっていただくことを求めています。要請では、国土交通職場のきびしい実態を説明し、大幅増員・体制拡充の必要性など、理解と賛同を大きく広めることが重要です。

国土交通行政の 体制拡充にむけて

いま、国土交通省のすべての職場で人員不足が大きな問題となっており、大幅増員を実現すると、国民の生命や財産をまもることや、我々自身の労働条件の改善にもつながります。体制拡充のとりくみは、自らの要求として、みんなできとりくみましょう。

体制拡充署名は、職場の労働環境改善だけではなく、国民の安全・安心をまもるとりくみでもあるため、全国的な運動となります。よって、職場内でのとりくみだけでなく、職場外の幅広いなかまと共闘し、とりくみます。職場内でのとりくみ

次に、職場外でのとりくみは、国土交通労働組以外の労働組合や関係団体へ署名の要請を行うことから、各地方協議会（地協）が中心となつてとりくみをすすめます。各地

国会議員要請を しよう

請願採択を勝ちとるためには、多数の国会議員を紹介議員になつていただき、かつ、国土交通委員会による採択が必要になります。そのためには、国土交通委員をはじめとした多数の国会議員から理解を得ることが重要です。地元国会議員事務所や、議員会館への要請行動を展開しましょう。

子どもが小学校に入学し、何かスポーツをさせたいと思いませんか？



野球をやってみよう！と、保育園ではサッカーボールで遊んでいた近所の子どもたちも大抵サッカーをしているなかで野球の回答を引き出したのは、野球好きな親バカによる誘導尋問であったことは否めない▼少年野球チームに入れてその練習を見てしまうと、帰宅後について、あーでもない、こーでもないという手取り足取り教えようとする、「コーチには違うことを言われている」と反論され、大抵、最後には鬱陶しがられて介入を終える。上手になって欲しい、試合で活躍する姿を見てみたいという思いが私をそうさせるのだが、ふと気が付くとその思いの主語は「私」であつて「子ども」ではなかった▼子どもが野球をしたくない、うまくなりたいと思つているならば、敢えて始めから答えを提示せず、自分で考えさせるように仕向け、答えに至るまでじっくり時間をかけてサポートする。こういうことが大切だとわかつていたようで全くできていなかった。子どもが昨日より今日、今日よりも明日成長できるよう私もがんばろう(L.O)